

## 第三十七期スクーリング講義録(ダイジェスト版)

## 仏教概論

## ―仏教の伝播・思想・倫理規範―

立正大学仏教学部講師 佐野靖夫 先生



こんにちは。仏教概論の佐野です。解説とか最新の研究論文もインターネットを使えば、今は簡単に手に入りますが、そういう教科書の概説ではなくて、これまで私自身が仏教あるいは仏教学の中で学んできたことや気がついたこと、思ったこと、実践的なことをお話ししたいと思っております。

## 一、はじめに

アメリカではトランプ大統領が誕生しました。かつてない激動の時代が始まるうとしております。これから私たちはどうなるのでしょうか。二千年五百年前に説かれた仏教はどういう意味を持つているのでしょうか。また、コロナ禍とウクライナ紛争、エルサレム・ガザ地区の騒動や紛争の中で二千年五百年ほど前にお生まれのお釈迦様の言葉は現在の我々にとってどのような意味を持つか。そういうことを今一度考えてみたいと思います。それでは、具体的事例として五つ挙げます。まず一つ目は「仏教とそのバリエーション」。二つ目が「人として守るもの」。三つ目が「正しいこと」とくに無慙無愧という問題。四つ目には説法のす

べて「初転法輪」。そして、五つめが実践的態度として「無我と十難無記」です。短い時間ではありますが、皆さんと一緒に考えていけたらと思っております。

## 二、仏教の伝播とそのバリエーション

最初に仏教の伝播とそのバリエーションにつきまして、まずレジュメ二ページの左の表、今から二千年五百年前にブッダガヤでお釈迦様(ゴータマ・シッダールタ)が誕生し、そして、ブッダガヤで悟りを開いた。それが仏教の始めです。そしてその仏教は、概説書では部派小乗仏教があつて、大乘仏教があつて、それから密教というように進んでいったとされています。でも、そこには、時間的インターバルというのがその間にあります。その仏教を証拠立てるもの、バリエーションというのを基本的に自分のものとして考えていく必要があるのではないかと、そのことは今日のテーマでもあります。最初に、お釈迦様の説かれたことは一つだというように一般には言われております。お釈迦様は実は待機説法というのをさ

れており、人物に合わせて語るということをされています。ということは、つまり、Aという人とBという人とは、受け止め方に違いがあるということ。ある人たちには、「ただ一人、山の中にこもって、自分で悟りを開きなさい」と言っておられたかという、一方、善知識というある人に対しては、「友達をいっばい作って、その中で囲まれて暮らし、悟りを開きなさい」ということもおっしゃっています。それで、どうしたらいいのかということで、アビダルマ(法の解釈)というものが生まれてくるわけです。

最初に小乗仏教を考えていきたいと思えます。セイロン、これはスリランカには、長くテラバーダー(上座部)があつたわけですが、実は東南アジアや地方に実際に広がっていたのは大乘仏教の方でした。小乗仏教では、特に基本的に仏教僧は生産をしてはならないということがあります。そうすると巨大なパトロンのいうか、そういう方々がつかない限り、仏教はなかなか育ちにくい。例えば今、皆さんが托鉢の人を自分の家に入れるかどうかを考えていただければいいかと思えます。当時、インドでは、ヒンドゥー教の人たちには、そういった人に施しをしなければならぬということが残っていました。

セイロンの部派仏教は小乗仏教テラヴァーダ(Theravada)と言われますが、広がらなかった。なぜならば、托鉢ということなのです。同じ頃の紀元前三世紀頃、ガンダーラ地方に伝わった大乘仏教は、仏像とともにその地で大きく花開きました。そして敦煌シルクロードに伝わって、中国、朝鮮半島、そして日本に伝わりました。長安を経て韓国、そして日本に入ってくるのは六世紀の半ばぐらいです。中国は四世紀、日本は六世紀半ばです。

ところが、インドにおいては、六世紀というのはイスラームの侵入があり、仏教が死滅してしまっています。インドでは部派から大乘、さらに密教が実現していましたが、密教の一部はヒンドゥー教として残りますけれども、イスラームが侵攻していたガンダーラ地方も六百年代中頃では仏教寺院はかなりの荒れ果てていたという記録があります。そして五世紀から六世紀にちょうど上座部仏教というのはセイロンの方から伝播して、パガン、アユタヤ、国として有名なシャム辺りには、十三世紀から十四世紀ぐらいに伝わっています。つまり相当新しいわけです。日本では、鎌倉時代ぐらいで、カンボジアとかタイだとか、そういうところに伝わっていった。そういった歴史的経緯があります。そしてガンダーラ地方にイスラームが侵入してきたわけですが、イスラームの勢力は非常に強く、後にはインドがイスラーム化するわけです。その時、仏教はヒマラヤを越えてチベットに逃れるしかなかった。バングラデシュ地方の東側は、ものすごい森林地帯があるのです。そして、その当時のインドのナランダ大学、ヴィクラマシーラ大学のような現代では大学と称される研究機関の人たちもヒマラヤ越えをしてチベットに逃げ出したわけです。ヒマラヤ越えは少数の人々には可能でした。実はチベット語というのはサンスクリット語、インドの言葉を変えた言葉です。そういう時代があつて、インドの最後の仏教がチベットに輸入され、そのチベット仏教というのは後の蒙古、モンゴルに継承されて一つの流れになつていくわけです、十六世紀になりますと、七百年代にラサに入ったチベット仏教も中国と同様にモンゴル仏教になった。日本では蒙古襲来以降です。そして。特に清朝、中国では最盛期になり

ましたが、日本は国を閉ざして鎖国という時代でした。いわゆるチベット仏教はインドの仏教の密教を伝えていましたが、日本に入ってくることはありませんでした。明治以降も中国の文化を取り入れることはありませんでしたので、現代になるまでほとんど入ってこなかったということになります。

アシヨカ王の石柱とか、サルナートの初転法輪場とかを以前、東京国際仏教塾で回りました。最初に作られた仏像というのは、このラホルの仏像で、ガンダーラ仏にあたります。それを見ると、本当にリアリスティックな形であるわけです。私たちが仏像というと、どちらかというと中国の仏教を下敷きにしていますので、こういうリアリスティックなガンダーラ仏には、あまり馴染み深いものはありませんが、最初期にはそういったものが作られたということになります。西方は現在では、イスラームでも塗り固められてしまっているの、ほとんどわからないような状況です。しかしながら、仏教は多分インドから西方に発達したのではないかというのが現在の学問上の知見です。仏教は、バリエーションがあまりにも大きい世界宗教の一つですので、仏教と一言で言っても、お釈迦様が最初に説いたものと大乘仏教では違ふし、もちろんチベット仏教も違っています。だからこそ、そのことをどう受け入れるかが、現在私たちに問われている問題であります。

### 三、最初に人として守るもの(五戒)

そこで、最初に人として守るものを形で見ているというのがこの五つです。説一切有部の論文

のうち、現存する最古層の一つで、仏陀の教説を初めて体系立てて論じたものとして知られているものです。仏陀は最高の真理とされる「四諦八正道」に向かうための前提として説かれたわけですが、優婆塞(ウパーサカ)五つの戒、「人を殺してはならない」、「盗んではならない」、「邪淫というのは、「他人の奥さんを娶ってはならない」、「嘘をついてはならない」、「心の統一を妨げるものを飲んではならない」という、仏教学を勉強するときに最初に学び、覚えることなのですが、最近になって、この五戒を守ること、例えば人を殺してはならないということ、それがどうかというのを考えたときに、お釈迦様の時代には、警察とか、治安とかそういうものがないので、そういった時に人を殺してはならないというような言葉、あるいは盗んではならないというような言葉が、本当にそれで実現するのかわかるかということは、現在に生きている私たちにどう考えるべき問題ではないかと思えます。実はこのことは、ウクライナの戦争でロシアの兵士たちが、非人道的なことを行つたとか言われておりますが、本当に私たち自身、この五つのことを守れるかどうかということは、真に私たちは考えなければならぬということだと思います。人として守るものを守ることができた。できなかった場合では、その人を罰すればいいかということもまた、考えておかねければならないのではないのでしょうか。では、正しいことは何かということについて話します。

レジュメの説法のところに、ドウツカという言葉があります。中国ではドウツカという言葉をとって「苦」というふうに述べたわけですが、本当に苦しいことは苦しいのでしょうか、例えば生まれる時の苦しみというのは何だろうとか、あ

るいは、生きていく苦しみはもちろんあるけれども、例えば子供が成長する喜びもあります。「苦」という苦しみというのは、「思う通りにならない」という、そういう意味の言葉であると。例えば生まれる苦しみという時、それには肉体的な痛みを伴わないけど、実は生まれる時には父親、母親を選べるわけではありませんので。親ガチャという言葉も流行っていますが、「思う通りにならない」というような言葉の方がしつくりとくるのではないのでしょうか。そうすると、生まれるとか老いのドウツカ、病のドウツカ、死のドウツカというのはわかります。あるいは「愛別離苦」というのは、自分とは本当に離れなさいけないというような人があるのか、「求不得苦」は、自分で欲しいものが手に入らない苦しみ。そして「五陰盛苦」は、それ以外のものという言葉で、「怨憎会苦」は会わなくていい人と、仕方がないけれども会わなければならない。それは苦しみであるということを言うわけですけども、「もう会いたくない人というの」やはりいます。そういう人と、会わなければならないというのは非常に苦しいし、「思うようにならない」というようなことがあります。お釈迦様もよくぞ言われたという気分です。そういうことで、ドウツカという言葉を使つ時、「思い通りにならない」というような言葉の方がいいのではないかと思います。

#### 四、正しいこと無慚と無愧〔大不善地法〕

四苦八苦・八正道というのは、この世の中は苦であり、それには原因がある。そしてそれを滅する方法がある。具体的にはどうするかというと、

その後、正見、正思惟、正視、正語、正命、正精進、正念、正定という八つの正しい道、つまり、正しい見解、正しい詩、正しい言葉、正しい行い、正しい生活、正しい努力、正しい記憶をして、正しい心の統一をはかればいいと、実は私がこれを最初に聞いたとき、正しいって何だろうという素朴な疑問が起りました。正しい見解、正しいということは、小学校の教科書にでも出てくるような、素晴らしいことを言っているのはわかるのですが、その正しさって何だろうということ。例えば日本で、あるいは東アジアで、一番用いられたのは、『妙法蓮華経』という經典なのですが、これは「サツトダルマブンダリーカ」と言われているのですが、この「サツトダルマ」というのは、正しい法を意味します。正しい法で、白蓮華のようなという意味で、白蓮華というのは、お釈迦様のことを指し、その釈迦様の言葉の中の最も正しいことという經典と一般には言われているのですが、そうすると、正しさって何だろうと私自身、思っています。そこで、レジュメの三頁の最初に戻ります。その正しいことというのは、無慚と無愧というように、最初期の仏教では呼ばれております。自らの行為をかえりみて、恥じることのない、恥じる心の動きのないものは無愧と言っています。自ら行動を、自らの行為に対して、他にに対して恥じる心の動きのないもの、これが愧という、それが無いもの、そういうものと説かれています。

つまり、自分によって、自分の行為を顧みて、そして、それを正しいとするか、正しくないかというものが、あくまで自分にあるのだということにあります。そうすると、自分自身で考えて、あるいは、自分自身のことを顧みて、正しいか正し

くないかを考え、正しいと思うことをやりなさいというのが、お釈迦様の最初の言葉ではないかと思ひます。つまり、「正見」「正視」というのは、自分自身に対して行う言葉であつて、単に何か正しいというようなことはないというのが、最初期の行です。

例えば、イスラームとか、キリスト教は、聖書に書いてあることが正しいことであり、それに対して、天地を創造するような、神というものはいないというのが、仏教の前提です。そうすると、何が正しいのか、何が正しくなるということを考えていくと、ここで述べたことが、判断基準になるのではないかとしように考えます。「五蘊」の話とか、「縁起」の話とかは数多くあるのですが、まず、レジュメの四番の最初のところに、五位七十五法というのが載っています。

これが、最初期の仏教の中で、説一切部が一番力を持っていた。その説一切部を打ち破るところから、様々な大乘仏教が出てきたという経緯があります。

まず最初に、五位五十六法で、これはサルヴァステイバーディンという説一切部のあらゆるものが全て存在するというような言い方で説かれている本なのですが、それを見てみます。その中に、無慚と無愧というのが挙げられています。その原因と結果というものを、論理的に導き出したというふう言われております。

これはフランス語の古い一九五五年の資料ですが、流派によって、例えばマハーディバのアラカンに関する記述の訂正に対して賛成か反対かというところに賛成しているのがマハーサンギカ、以下、ティラバーダ、サルヴァステイバーディンはすべて反対している。三番目の一切が存在していると

いうことに賛成しているのはサルヴァステイバー  
デインだけど、マハーサンギ力は反対している  
という表があったので掲載しておきました。

## 五、初転法輪と実践的態度 無我と十難無記

お釈迦様がブツダガヤで悟りを開いて。そして  
最初に言ったのは、この世の中は思い通りになら  
ない、それには原因がある、その原因は滅するこ  
とができるのだと。具体的にはどうすればいいか  
というので、八正道、この八正道の内容は、先程  
述べた通り、自身の正しいと思う、正しい思いと  
いうのが必要だという。その正しさというのは、  
自分自身で考えなさいということです。お釈迦様  
が自分で集められたものではありませんが、それは  
悟りを開かれたからであり、悟りというのは誰で  
も開けるものであるというのがお釈迦様の基本的  
な考え方でした。そうすると私たち人間の一人が  
悟りを開くということが前提ですので、お釈迦様  
はくどくと言わなかったのだと思います。最後に、  
実践的な態度ということで、無我と十二支縁起を  
取り上げました。この無我というものは形而上学  
的な範疇に入るわけですが、初期の經典では、  
アートマンというものを私のもの、私、私の自我  
の三つに分けております。一切の具体的なものを  
一つひとつについてこれは私のものではない。こ  
れは私ではない。これは私の自我ではないことを  
反復して説いています。

## 六、アートマン

アートマンを認めるかどうかは、実はアートマ  
ンというのは、ウパニシャットのいわゆるヒン  
ドゥー教のオーソドックスな考え方であり、ヒン  
ドゥー教の考え方というのは、大きく分けて二つ、  
「サンサーラ」と「カルマ」という二つに代表され  
ます。

つまり悪いことをやったら自分に入ってくるも  
の、輪廻がずっとそのままあるのだと。そして持  
続するためには何が必要かというので、アートマ  
ンというのは必要であるというのが、ヒンドゥー  
教のオーソドックスな考え方になります。

そうすると、インドで、例えば裕福な家に生ま  
れた人というのは、その前世が良かったから、良  
いところに生まれたのだ。するとインドで業を背  
負って生まれたとか過去のアートマンというのは、  
自業自得になります。アートマンというのがあっ  
て、それが次の正に移行するという考え方なので  
す。ところが、お釈迦様はこのアートマンという  
ものを否定するわけです。そして原因があつて結  
果があると、お釈迦様はここに縁というものを持  
ち込みます。縁というものは、例えば非情な殺戮  
者であっても、仏縁があればその結果、悟りを開  
くことができるというのが、お釈迦様の考え方な  
のです。それに対してアートマン、ヒンドゥー教  
では、原因結果がそのままずっとアートマンの  
中に薫習くんしゅうされていきます。

お釈迦様は無我、アートマンは存在しないとい  
うことを言っているわけです。それで存在しない  
のだけでも、あるといったのは説一切有部で、  
説一切有部は批判に対して、阿頼耶識というもの

に薫習されるのだと説いたのです。アートマンと  
いうのは一切ないというのは空の思想と言われて  
いるのですが、説一切有部は五位七十五法がある  
というふうに存在を主張したわけです。

どうして存在を主張したかというのは、お釈迦  
様自身を否定できなかったからです。つまり、お  
釈迦様という人物は説一切有部の絶対的な事柄な  
ので、お釈迦様を存在しないとは言えなくて、そ  
れで考え出されたのが、一切はあるということな  
のですが、大乘仏教ではお釈迦様自身を否定しま  
す。お釈迦様の生まれそのものを否定するという  
前提で、大乘仏教は説かれていたわけです。けれ  
ども、それでも阿頼耶識は必要と言っているのだ  
すけれども、阿頼耶識自身がそういうアートマン  
を想定しているのではないかとということで、議論  
が多く生まれるわけです。そうすると、いわゆる  
大乘仏教とか密教は、数多くある仏教のバリエー  
ションの一つだと考えられ、初期の仏教思想の影響  
を見て取ることができるわけです。アートマンとア  
ートマンを否定するというのは、インドの基本的な  
考え方を否定するわけです。インドは西暦七百年  
代ぐらいにイスラームの支配を受けましたが、い  
まだにヒンズー教は生き残っています。つまり、  
アートマンが存在するという考え方が生き残って  
います。仏教は中国、あるいはチベット、東南ア  
ジア、日本という少数の国、その中にしか残っ  
ていないというのが事実です。例えばアートマン  
があるとすると、人はどういった状態かというと、  
ヒンドゥー教の中ではアートマンをどうするか良  
いかは考えられました。

ウパニシャッドの中では、アートマンというの  
は自分自身で考えないといけないという議論もあ  
るのですが、ヒンドゥー教一般の中では、新しい



ガンジス川に遺灰を流すことで涅槃に達すると信じる多くの人々が訪れるインド・ヴァーラーナシー

象徴的なシヴァとかヴィシュヌとかの神様を想定した、新たな聖典が作られました。一番有名なものは紀元前後のバカヴァットギーターです。大乘仏教が花開いた同時期に、インド世界ではバカヴァットギーターとかラーマヤナが非常に受け入れられた時代に入ります。

そうすると、ヒンドゥー教世界では不幸で生まれた子どもがずっとそれを背負わなければならぬ。つまり自業自得で生まれたわけなので、そういうような子どもたちに、この子は自分自身で、例えば野球がうまいから野球の選手になる、あるいは、勉強ができるから政治家になるうとか、そ

ういうようなことで、自分を生かすというようなことは当然としてはならない。つまりインドではトイレの掃除というのは非常に最下層のカーストがやるわけですが、その最下層のカーストで生まれたらば、最下層のカーストを全うしなければならぬ。そうすると、死んだ後にアートマンが浄化されて神々の目に留まり、もう少し上の裕福なる家庭に生まれ変わるだろうというふうに言われます。それが最近のインドのカースト制度に非常に大きな問題を残しております。富裕な人が生まれたのは前世で良い行いをしたから金持ちに生まれたと、貧乏な環境やハンディキャップを持つて生まれた場合、それは前世で悪い行いをしたから自業自得であり、その環境を全うすることこそが神々の目にかない、死後にアートマンが浄化されるのであると、そういうことを言っておりますので、そうするとこのアートマンが存在するという考えにはどうかと思索した次第です。

因果に縁という新しいファクターを押し込むというのは仏教の大きな特徴で、大乘の中の、いわゆる最高の真理と言われる唯識だとかは、いまだに揉めております。真宗は阿弥陀さんにひたすらおすがりする、禅宗はいや、そういうものでもないのだよということを聞きますので、どれが正しいかというのは正直言つてよくわからないです。皆さんが考えて、そして見つけていくしかないのかなと思っております。

『十難無記』というのが最後にありますが、「十難無記」というのは、お釈迦様にとつてある一つの実践的態度なのです。つまり世界は常時であるとか、そういう形而上学的な、あるいは真理に達成者がいるかないかということに対しては、本当に「無記」を通して、「無記」というのは喋らな

いということ、語ること自体、マイナスのところには陥つてしまふのではないかとということで、お釈迦様は、世界は常住であるか別異であるか、あるいは同一であるか、断滅であるか、身体と靈魂は同一であるか、別のものであるか。存在者の実在か否かという、そういうものに対して純粹美性では何も言えないと。そういうことが十九世紀に出ています。カント自身は彼の『純粹理性批判』の中で、神の存在というのを認めているわけですけども、本当にどうなのか。あるいは人間を離れてその議論ができるのかどうかと、彼はあくまで人間にとどまっている。

信仰というなら何を信じようが、それこそイワシの頭でもいいのではないかとというようなことになります。それはどうなのかなというところで、とどまるとか、とどまれないかということで非常に悩んでおります。正直言つて、例えばコロナ禍、ウクライナ情勢、エルサレムの問題というのは、どうしようもない人間性の様々なものを見せられているということであり、お釈迦様というのは、およそ二千五百年前に生まれていゝんなことを説かれたのですが、本当にお釈迦様の言葉、お釈迦様のメッセージが現在の私たちに何を示しているのか、そういうことを考えていくことが必要なのではないかと思ひながら、今ここで話している次第です。皆さん、これからたくさんいろいろな講義も聞かれますので、そういういたものを確かめて、本当にどうなのか、そして自分がどうするのか。を考えていた、たくさんいかに、そういうような状況であります。ご清聴、

(終)